

- ◇軍隊内闘争の到達——彼らはなぜ立ちあがったか？（第9回例会報告）…………… 1
- ◇報告を終えて——『神聖喜劇』の到達と出発（伊藤龍哉）…………… 2
- ◇模擬死刑における大前田の退場という謎（山本恵美子）…………… 3
- ◇『図録 作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡』ができました…………… 4

軍隊内闘争の到達——彼らはなぜ立ちあがったか？

第八部「永劫の章」（第一～第三）、伊藤龍哉さんの報告と討論

2020年2月22日、HOWS連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」の第2期第5回（通算8回目）が開かれました。報告者の伊藤龍哉さんは自己の問題意識に基づいて抜き出した場面について、作品本文からのていねいな引用を通じて解説しました。

作中に出てくる石川淳や太宰治の名前から連想される、作者大西の彼らの仕事への目配り。また冬木が幼少時に受けた部落差別の厳しさを改めて確認した。剣韋すり替え事件について沈黙を守る冬木の心理、そこをほぐしていく東堂の言葉や、橋本の伯父と水平社との関わりを確認しました。

ドイツ・ソ連戦への東堂の見方の変化が虚無主義克服の一つの契機となります。そして上官に対する新聞の閲覧要求に同年兵の同調が集まるという、後段の模擬死刑事件の伏線となる描写。東堂の暴力に対する問いを、ソレルの『暴力論』における、軍隊は改革するのではなく破壊すべきという見方との比較検討から、いまだ発展途上と考え、大西がその問いを別の作品でとらえ直していることを伊藤さんは紹介しました。

模擬死刑の場面では大前田は意図してかどうか、席を外しています。そのことをどう考えるか。伊藤さんによると、大前田の「人殺し」には「敵だから殺す」というある種の「潔癖さ」「倫理」があるといえます。ゆえに仁多らの軽薄な「模擬死刑」への反感があったのではないか。その仁多らに反抗する冬木の言動が、大前田に何を感じさせたか。大前田の内部に潜む「兵士ならざる自己」への目覚めがあったのではないか。これが次回の展開に関わってきます。

冬木は道元の「正法眼蔵随聞記」と和辻哲郎の「沙門道元」から影響を受けており、真理、すなわち彼にとっては「人のいのちは、何よりも大切であります」ということに殉じて、戦場では鉄砲を天に向けて撃つという、素朴だが根底的な非暴力の思想の吐露に至りました。冬木の発言に伊藤さんは「天皇を戴く日本国をついに撃ち抜く」と最大の賛辞を表明しました。

討論では、石川淳が大西の母校である福岡高校において、教師でありながら学生運動に加担した過去があり、大西は後の世代であるがそのことを意識している、との指摘がありました。また、大前田が冬木の発言を聞いていたのではないかという伊藤さんの推測の可否や、人を死なせてしまった過去を抱えるゆえの冬木の独自性についての考察。自己を正当化する大前田の論理を冬木の言葉はどう揺さぶったか、また東堂の中にある暴力性・男性性への傾斜とそれはどういう関係になるのか。マルクス主義の影響下にあり「法感情」（法治主義）を重んじる東堂と、宗教的感情に根差す冬木の反戦思想では違いがあるのではないか。軍隊という制度を挟んで絶対非暴力主義とマルクス主義の間にある矛盾。被差別部落民である冬木の中にあった天皇に「人並みな忠義を尽す」という意識はどう克服されたのか。冬木の尋

問場面が出てこないことをめぐって、視点人物である東堂の目に記述が限定されていることへの気づき、それと映画のシナリオのような形式が導入されていることとの関連。「安芸の彼女」に対する東堂の心の揺れについては、出席者が「私はこう読んだ」と想像をめぐらせる。末永「ガンスイ」(知的障がい者)がいたぶられるという差別問題を見過ごす村上少尉の帝国主義者としての本性。末永と、同じくガンスイと呼ばれる鉢田らとの違いは何か？ 立ちあがった兵たちは冬木や東堂の言葉のどこに呼応したのか、巖原閥の江藤までなぜ立ちあがったのか？ 差別に基づく末永への悪質ないじめに抗して、冬木のなかで起きた「国民」意識を乗り越え普遍的「人間」に至った変化。道元の影響にはプラス面だけでなく、絶対者に依拠するというマイナス面もあり、差別との闘いに立ちあがるには東堂や橋本の行動からの感化が必要だった、という指摘など。

参加者それぞれがさまざまな角度から疑問を投げかけ、それに報告者のみならず参加者同士でも活発な応答が交わされました。小説世界の奥行きと、そこに盛り込まれた多岐にわたる問題意識と向きあい、参加者が互いに教え合い学び合う協働性を味わったのは、貴重な体験でした。いよいよ次回は最終回になります。

報告を終えて——『神聖喜劇』の到達と出発

伊藤龍哉 (HOWS 受講生)

分厚い文庫本にして四冊、これまで東堂太郎と並び歩き、ともに何度も往還し、ときには迷宮に踏み入りながら濃厚な読書体験を経て来た読者は、〈第八部 永劫の章 模擬死刑の午後(第一、二、三)〉に至り、ついに螺旋は頂点に達したことを知る。入隊からまもない一月十九日の朝、「冬木二等兵は、まちがえて、嘘を言いました。冬木も東堂二等兵とおなじであります。朝の呼集時間のことを、冬木二等兵も、忘れたとじゃなかったとで、知らんじゃったとであります。」といったときと同じ力強い声が、この日(三月十八日)ふたたび、東堂の左後方で上がったのである。——「止めて下さい。人のいのちを玩具にするのは、止めて下さい。」

上官は冬木に詰め寄り駄目押しする。お前は、戦地へ行って、どちらに向けて銃を撃つつもりか。軍人が、他人のいのちやら自分のいのちやらを大切にしていた日には、軍隊はまるで成り立たんよ。戦地で、お前は、どうするのか。冬木の解答に、東堂は眼から鱗が落ちる。——「はい。鉄砲は、……」「前とかうしろとか横とか向けてよりほか撃たれんとじゃありません。上向けて、天向けて、そりゃ、撃たれます。」

その発言は平凡なようであって、実は非凡な着眼であった。敵味方を問わず、かれは鉄砲(武力)を用いる気はないと明言して、決然と人殺しを拒否したのである。冬木の解答は、このところますます東堂を悩ましていた難問、すなわち、「お前は戦地で何をするのか。」にたいするひとつの応答であり得て、それは長閑な春景色の白昼、東堂を刺し貫いた一条の閃光であった。

しかしこのとき、人間の根柢を揺さぶられたのは東堂ただ一人であったろうか。いや、そうではあるまい。わたしにははっきりと見える。両目をまん丸開けて驚愕の面持ちで呆然と立ち尽くし冬木の宣言を聞き留めた人物が。——「人非人でもあり『人間的な、あまりに人間的な』男でもあるような日本農民下士官」大前田文七。

大前田軍曹は一連の模擬死刑の場面からは意図的に退場していた。「小便がしとうなった。」そうかれは田中軍曹に言い残し、その場を離れ、遠巻きに事の成り行きを眺めていた。それには「何か格別の事訳」がありそうだと東堂が直観したとき、二月三日の大前田の「演説」の一節が忽然と甦ってきた。

——「こら、貴様ら。おれが殺したとは、人は人でも、日本人じゃないぞ、敵ぞ。敵を殺したとの、どこがめずらしいか。どこが化け物か。おお？ 貴様たちや、戦争をなんと思うとるか。なんのための戦争と思うとるか。遊び事じゃないぞ。綺麗事でもありゃせんぞ。」

大前田の人殺しには、ある「潔癖」が、そこには「倫理」さえもが存在する。その内容を端的にいいあらわすならば、「あいつは敵だ。敵を殺せ。」という思想である。その大前田に、いま、冬木の宣言が真っ向から対峙している。冬木は、味方はもちろん敵も殺さないというのだから。冬木は、剣鞘事件をとおして——その事件の全体を把握するまでには、東堂や橋本との共闘があった——、過去の「殺人事件」における自己の振る舞いを対自化することで、模擬死刑の午後の宣言に辿り着いた。東堂もまた、「我流虚無主義」の思想を自己にたいして対自化することで——その過程には橋本や鉢田や生源寺や室町や曾根田や村田や白水や冬木、村崎らとの共闘があった——、我流虚無主義の我流揚棄の道を歩きはじめた。では大前田の場合はどうか。

『神聖喜劇』は〈模擬死刑の午後〉で終わらない。次回は〈面天奈狂想曲〉である。そしてそれは断じて後日談の類ではない。大前田の「よろめき」は何をわれわれに投げかけるか。

いまや冒頭の一文、「〈模擬死刑の午後（第一、二、三）〉に至り、ついに螺旋は頂点に達したことを知る」は訂正されねばならないだろう。螺旋とは、けっして完結することなく上昇する円であった。

【追記】以下二つの引用は、大前田の「よろめき」を探る手掛かりになると考え、記す。

「また、戦争・戦闘が毎日行われている戦地・戦場という非日常的時間から、——しかもその中で虐殺暴行をほしいままにした人間（たとえば大前田軍曹）が、——おなじ軍隊とはいえ国内部隊の日常的時間へ、どのようにして平然と入り込むことができたのか、ということも、「私」東堂にとって、ひいてまた作者私にとって、ずいぶん奇怪な現象・すこぶる深刻な主題でありました。/戦後現在における普通の父、普通の夫、平凡な市民が戦争中には中国や南西太平洋やの戦線で虐殺したり暴行したりした、ということの意味を、われわれは、深く思案しなければならない。「それが戦争よ。」とうそぶいていた男が、勤務の場所を離れた「それくらいのこと」で云云などという「批評」は、戦争と軍隊と人間とにたいする実に浅はかな見方です。」（大西巨人「全五巻刊行後三カ月の日に」『大西巨人文選3 錯節』所収）

「アレクサンダーとマルガレーテ・ミッチャーリヒが『喪われた悲哀』に記した病理からうかがわれるのは、少なくともヒトラーのファシズム下で起こったドイツの惨禍と、ドイツの家庭における親密な感情の方向性のあいだに関連性があったということである。とまれ、それら暮らしの報告を読めば読むほどに、甚大な結果を招いた社会ぐるみの常軌逸脱には心理＝社会的な根があった、という仮説が正しいのではないかと思われてならないのだ。」（W・G・ゼーバルト「空襲と文学——チューリヒ大学講義より」『空襲と文学』所収）

模擬死刑における大前田の退場という謎

山本恵美子（HOWS 受講生）

『神聖喜劇』「第八部 永劫の章」の「模擬死刑の午後」において、一つの大きな疑問は、なぜ、大前田軍曹は末永二等兵に対して悪質ないじめが実行されている場から、すっと姿を消してしまうのか、ということだ。白水や生源寺、東堂が、その場から立ち去っていく大前田軍曹の行動に奇妙さを覚えたように、それは私にとっても謎である。何か「ほかの奥深い訳」があるのかを白水も東堂も、漠然としかわからず、「その本体を嗅ぎつけることはできなかった」（288 ページ）。作中において、たとえば東堂の洞察を介しても大前田軍曹の行動の理由が読者に明示されることはなく、何かがあることを暗示される

のみだ。

伊藤龍哉さんの報告で、殊に私が啓発を受けたのは、この大前田軍曹の退場に関する解釈であった。伊藤さんは、舞台上から姿を消した大前田が実は、冬木のあの決然とした発言を聞いていたのではないかと読んだ。そしてそのことが、大前田を混乱に陥れ、次章の「面天奈狂想曲」で大前田に起こる出来事へと発展していくのではないかと。

大前田は「戦争とは殺して分捕ることである」と言明している。そして、大前田はそのテーゼに従い、軍人として「殺して分捕ること」を実行してきた。戦争は遊び事でも綺麗事でもない、とも彼は言っている。その大前田にしてみれば、末永に対する仁多軍曹らの悪質な仕打ちは「遊び事」に見えたに違いない。胸糞悪い思いがしたのではないかと推察される。であるならば、冬木の「人のいのちを玩具にするのは、止めて下さい。」という絶叫と、戦争や人殺しを「遊び事」として扱うような行為に対する大前田の嫌悪に、部分的な類似さえ感じられてくるのだ。もっとも、両者は「遊び事」ではない戦場の殺人に対する立場が決定的に異なる。

自分が殺したのは、人は人でも日本人じゃない、あくまで敵である。敵は殺さねばならない。これが戦場の虐殺者たる大前田が受け入れた、戦争の論理である。これが彼の理性を保つ論理でもあったろう。そして、この論理を可能にするのは差別主義だ。それに対して冬木は、鉄砲は「上向けて、天向けて、そりゃ、撃たれます」と、その論理を越えていく発言をした。すなわち、敵も味方も殺さないという宣言である。人を死なせてしまった経験をもつ冬木の、部落民として差別されている冬木の、実に重い言葉だ。

自分を人殺しだと思ふことの苦しみとは、いったいどんなものだろうか。冬木はその苦しみを負っている。その冬木の言葉を受けて大前田は、「自分は人殺しなのか？」というあまりにも重い問いを、自らに行わなければならなくなったのではないだろうか。このように考えると、虚無主義というワードを東堂太郎だけでなく、大前田文七に当てはめてみる必要があるようにも思える。未だ大前田の対する謎は深い、小説の裏側で大前田が自己の深淵を覗いているのであれば、時間はかかるが、私も大前田の深淵を覗いていきたい。

以上、講座の印象記というよりも、講座の発表内容を受けて私の思考がどのように発展したかを述べる形となってしまった。最終章「面天奈狂想曲」での議論でまた新たな視点が得られるのが楽しみである。

『図録 作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡』ができました

『図録 作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡』（学校法人二松学舎、2020年3月）ができあがりました。企画展「作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡」（二松学舎大学会場、2020年2月4日～3月14日、東京古書会館会場 2020年2月21日～3月14日）の展示図録を兼ね、二松学舎大学に寄託された大西巨人資料のカラーで紹介するものです。『神聖喜劇』の自筆資料類も多数収録されています。HOWS 事務所にも置いてありますので、ご覧ください。作品を議論する一つのきっかけとなれば幸いです。

『図録 作家・大西巨人——「全力的な精進」の軌跡』表紙（略）